

056 天に富を積みなさい他(山上の説教VI)

(マタイによる福音書 6 : 19~33)

※イエスの山上の説教(説明)は、モーセの律法の意図を解説したものである。

天に富を積みなさい(マタイによる福音書 6:19~21、ルカによる福音書 12:33~34)

→天に富(宝)を積む(蓄える)とは、永遠に価値あることのために、才能、時、お金などを用いることである。

「あなたがたは地上に富(=宝、マモン Mammon→自分の大切に思っている物、無くてはならない物)を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もある(→地上の富に心が囚われているのなら、その人の心は地上にある。天に富を蓄えているのなら、天上にある。)のだ。」

→マモン Mammon (マンモーナス:ギリシア語):不正な財を指して用いられたアラム語の語彙で、物質的「富」または「食欲」をいう。マモンが神格化され「偶像」となる。

→知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです(ローマの信徒への手紙 6 : 16)。

→ユダヤ教では、物質的な豊かさは、神の祝福を受けていることの証拠となった。彼らは「神は、愛する者を富ませる」(口伝律法)と教えていた。それゆえ、ファリサイ派の人たちは熱心に富を追求した。

→富という主人は、①あらゆる手段を使って出来る限りのことをせよ、②この世の富、お金とそれによって名誉を得ることを人生の目的とせよ、と私たちの心を神から遠ざけるために叫んでいる。

クリスチャン 今までの価値観<今の価値観

体のともし火は目(マタイによる福音書 6:22~23、ルカによる福音書 11:34~36)

6 : 22 「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、

“The eye is the lamp of the body. If your eyes are healthy, your whole body will be full of light. (NIV)

“The lamp of the body is the eye. If therefore your eye is good, your whole body will be full of light. (NKJV)

6 : 23 濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

But if your eyes are unhealthy, your whole body will be full of darkness. If then the light within you is darkness, how great is that darkness! (NIV)

But if your eye is bad, your whole body will be full of darkness. If therefore the light that is in you is darkness, how great is that darkness! (NKJV)

(1)回復訳

6:22 目は体のともし火である。だから、あなたの目が単一(→single:ひたむきな、誠実な)であるなら、あなたの全身は光に満ちる。

→わたしたちの二つの目は、一度に一つの物にしか焦点を合わせることができません。もし何とかして一度に二つの物を見ようとするなら、わたしたちの視力はぼやけてしまいます。わたしたちの目を一つの物に焦点づけるなら、わたしたちの視力は単一に焦点を合わせることができ、体全体(気分)は明るくなります。わたしたちの宝を天と地の両方に蓄えるなら、わたしたちの霊的な視力はぼやけるでしょう。わたしたちが単一の視力を持つようとするなら、宝を一箇所に蓄えなければなりません。

6:23 しかし、あなたの目が悪(→evil:悪い、邪悪な)ければ、あなたの全身は暗い。もし、あなたの中にある光が暗ければ、その暗さはどれほどであろう!

→一度に二つの物を見ると、どちらの物にも焦点を合わせることができません。それは、わたしたちの目を悪くし、そうであれば、わたしたちの体全体(気分)は暗くなります。

(2)真理発見記

体の明かりは目です。だから、あなたの目が澄んでいれば、あなたの全身は明るい。しかし、あなたの目が邪悪であれば、あなたの全身は暗い。だから、あなたの内なる光が闇であれば、その闇は、どれくらいか。

(3)新改訳

からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るい、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。

神と富(マタイによる福音書 6:24、ルカによる福音書 16:13)

「だれも、二人の主人 (→①神、②富：この世の値打ちある物、お金→神に従い生きるか、富に仕え、富を頼りにするか。) に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで (→心に懸ける) 他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」
→愛しているから、その人の言うとおりにし、その命令を聞き、その支配や指示に従い、その人に自分の重荷をも任せること、つまり、完全に、その主人に委ねることによって、生きることができる。

思い悩むな(マタイによる福音書 6:25~33、ルカによる福音書 12:22~32)

→思い悩む(思い煩い)は、神に信頼していない人の心の状態(不信仰)である。

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食うか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食うか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云うて、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

→ここで取り上げられている真意は、今日の食事や衣服のことではなく、5年後、10年後、20年後の将来への不安である。

→「働きもせず、紡ぎもしない。」は、労働を否定したり、怠惰を奨励しているのではない。

実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました(テサロニケの信徒への手紙二 3:10)。

→働かざる者食うべからず。

④この言葉は、怠けて働こうとしない人間に食べる資格はないということで、働かずに遊び暮らす者を戒める言葉です(働きたくても、何らかの理由で働けない人は、これには該当しません)。